

阪上幸男様

昭和85庚寅6月26日

阪上幸男様

前文ご免下さい。長崎西高同窓会の運営について大変お世話になっております。大変なお仕事、ご苦勞も多いことと存じますが、宜しくお願い致します。

私は4年前から、奈良新聞のコラムニストをしております。月に一度ですが、もう50回を越えました。その中で、長崎西高に関係するもの2篇をお目にかけます。

艸々

梁瀬 健

梁瀬 健

音 清 風 明

私より7歳年長のTさんは、昭和20年の春には二等兵として満洲の守備隊に配属されていた。そのある日、隊長は庭に整列させられた。隊長は隊員を見渡してこう言った。「この中に特攻隊を志願する者がいれば一歩前へ出よ」と。この時、Tさんは何のためらいもなく足が前に出たという。そうして数人の特攻隊志願兵は内地へ送還されたのである。しかし、内地では訓練の飛行機が不足していた。待機すること3カ月、8月15日の終戦を迎えたのである。



梁瀬 健

運と不運の分かれ道

もう)よりも軽いという考えが、その元になっていると思われる。私の高等学校時代の同級生であったA夫人は、長崎市家野町に住んでいたが、戦争末期には長崎市郊外の山村に疎開していた。昭和20年8月9日、当時国民学校6年生であったA夫人(当時はS嬢)は、たまたま家野町の実家に帰って来ていた。家野町は原爆の爆心

時間も歩いて山陰にさしかかった時、目もくらむ閃光(せんこう)が走り、耳をつんざく大音響が起った。気づいた時には2人は溝の中に入っていた。母はわが子をかばって溝の中に伏せたのである。行きたくないと言う娘の手を無理に引いて家を出たことが、この親子の命を救ったのである。A夫人は「私は悪運が強いのです」

水は高いところから低いところへと流れる。このようにマクロな世界の自然現象は、因果関係がはっきりしている。しかし、原子や電子のようなミクロな世界になると、因果律は成立しなくなる。このミクロの世界の確率的に起こる現象が、マクロな世界に影響を及ぼすとしたら、マクロな世界も因果律が崩れることはあるかもしれない。

地に近い所である。朝10時ごろ、S嬢のお母様は「今日は疎開先に衣類を取りに行くので、一緒に行きましよう」とS嬢を誘った。

と述懐するが、これは悪運ではなく強運である。多くの人は「運」や「運命」を何となく肯定し、「運がいい」「運命に弄(もてあそ)ばれた」などと

人の心の発露である意志や行動には、気まぐれとも思われることがままある。そうして偶然は必然のようにとらえられる。マクロな世界でも、人や動物の心には因果律は成立しないのである。私は「運」や「運命」を信じていないが、努力という意志の力で、強運をたぐり寄せることができようである。

S嬢は家で遊んでいたかったが、お母様に手を引かれるように家を出たのである。小1

(やなせ・たけし) 大阪教育大学名誉教授

明風清音

私は、昭和21年春、旧制長崎中学に65期生として入学した。旧制中学は5年制であったが、昭和22年の学制改革によって新制中学が発足したため、私たちの下級生は、なく、中学4年になる時に新制高等学校の1年生となった。戦後すぐのことでもあり、原爆を受けた長崎は混乱状態にあった。

食糧事情は最悪で、ビール瓶の弁当をもつてきた学友がいた。何とビール瓶にどろどろのおかゆが入っているのである。それとても麦や芋が混ざったおかゆである。南国といってもやはり冬は寒い。その冬でも靴下をはかない生徒がほとんどであった。靴下は贅沢(ぜいたく)品なのである。そのよつな劣悪な環境でも、勉強だけは頑張っていた。この中学生生活3年間を通じて、私たちは我慢することを学んだと思う。

梁瀬 健

昨年、平成21年11月6日に、ホテルニュー長崎で、旧制長崎中学同窓会の解散式が行われた。最後の入学生の私たちがすでに76歳であり、会員の高齢化によって、解散ということになったのである。

は、作詞が吉丸一昌(「早春賦」の作詞家)、作曲が岡野貞一(おぼろ月夜)の作曲者)で、名歌の誉れ高いものであった。

竹は焼かれても／節(よ)はとこ とわに残るなり／その竹のごと玉のごと／我等も名こそ惜しむなれ

ああ旧制中学同窓会

長崎中学の元気振興歌と相容れるものである。人の価値はその人にある

散などしなくてもよいように思われたが、長崎中学創立125周年ということもあって、くぎりをつけて、たのであらう。最後の長崎中学校歌斉唱には、さすがに感慨深いものがあつた。この校歌

丈夫(ますらお)

同窓会解散でこの校歌は完全に過去のものとなってしまった。

か、それともその人がした仕事にあるのか、ある人は前者の方を重視している。まず、自分を内面から磨くこと、これが自律につながる。旧制長崎中学は消滅したが、その精神は長崎西高に生きていると思う。



玉墮(お)ち玉は砕けても／白きは遂に失わず／竹破(や)れ

玉墮(お)ち玉は砕けても／白きは遂に失わず／竹破(や)れ

(やなせ・たけし) 大阪教育大 学名誉教授)